経費分担の課題指摘

日本学術会議検討委回答案 実現意義は認める

ILC 東北誘致

【東京支社】日本学術会議が設置した国際リニアコライダー（ILC）計画の見直し案に関する検討委員会と技術検証分科会は14日、都内で合同の第10回会合を開き、文部科学省への回答案を示した。「実現は重要かつ望ましい」など意義は認めた一方「経費の国際分担の見通しがない」など、課題を厳しく指摘した。結論は持ち越しとしたが、最終的に慎重意見となる方向に傾きつつある。

【関連記事4面】

回答案では、陽子をぶつける欧州合同原子核研究所（スイス、CERN）の円形加速器に対し、電子を用いるILCは「素粒子の詳細研究に適し、一般論として実現が重要かつ望ましい」と説明。一方、約8千億円の建設費用を賄うための国際分担や人材確保に関しても「見通しが明らかでない」と指摘した。

経済波及効果は「議論の余地がある」とし、国際科学都市の形成も「データ解析がオンラインでできる時代に研究者が現地に常駐する必然性は乏しい」と記述した。学術界全体でのILC建設の理解が不足しているとし「さらに丁寧かつ継続的な説明と意見交換が不可欠」と課題を挙げた。

会合後、検討委の家泰弘委員長（日本学術振興会理事）は「他分野の研究者に対しての説明や対応が十分ではないと思っている。国の判断がどうなるかは分からないが、（誘致に手を挙げるのは）客観的に年内は難しい」と語った。

傍聴した東北ILC準備室フェローの山下了東京大素粒子物理国際研究センター特任教授は「事実が反映されていないところや情報が抜けている点は説明したい」と、検討委に説明資料を提出する方針を示した。

次回の合同会議は21日に予定。検討委の最終回答は日本学術会議幹事会での了承を経て、文科省へ提出される。政府はこれらを踏まえ対応を決める見通しだ。

ILCは地下約100㍍のトンネルに直線型加速器（初期整備延長約20㌔）を設置し、宇宙誕生の謎を解明しようとする国際プロジェクト。素粒子の電子と陽電子を光に近い速度でぶつけて高エネルギー状態をつくり、未知の物質や働きなどを調べる。本県の北上山地（北上高地）が最有力の建設候補地とされる。

日本学術会議の回答案のポイント

- 陽子加速器の相補的役割を担う電子加速器の実現は重要であり、望ましい
- 国際経費分担の見通しなしに誘致を決定するのは危ない
- 計画に携わる人材を長期間、十分な人数を確保できるかが課題
- 基礎科学分野の国際共同研究に日本が貢献する意義は大きい
- 地震や火災など不測の事態への対処、安全策の計画立案が必要
- 諸分野の学術コミュニティーとの対話が不足し、丁寧な説明と意見交換が不可欠